せんでした。ここでの作業は丸太のおろしです。実に大変です。昼夜を問わず、貨車が駅に入ればおろし作業に刈り出され、八人一組で一貨の木材をおろすのです。最初上の部分は力もたいして要らずゴロゴロとおろすことができるが、だんだん下になると二抱えもある大木、十分な食事もしていない我々、全身の力を入れ作業をしないとけがをする。野外の気温は零下三十度より下がっている。気の抜けない命がけの仕事である。重量物であるから下手をしてはねられて死亡した人もあった。実に気の毒なことである。戦争は終わったのになぜ我々がシベリアまで来て命を落とさなければならないのか、全くやりきれない。

ここでは三交替での作業もあった、シラークブロックづくりだ。ボタ山の灰をセメントでかためたブロックづくりである。収容所から三十分以上トラックに乗って行ったところに工場があり、昼勤はまだいいが、第三師団は深夜一時から八時まで一週間ずつ交替です。まだ火のあるボタ山から灰の運搬ではやけどをするし、屋内での仕事は機械に追われるし、かなりの重労働である。ここでもノルマが身を削った。

長い長い抑留生活を終わって夢に見た祖国へ帰れる日が来た。昭和二十四年九月、遠州丸は私のシベリア抑留生活に終止符を打ってくれた。異国の地で散った戦友の霊よ安かれ。

シベリア抑留記

島根県　八幡義隆

抑留

収容所に入った、タイセット地区第四カロンである。初め入ったのが幕舎で、ここで初めて八中隊の戦友と一緒になった。幕舎の中は寒い。中でたき火させているが寒い。そのうち編成がありペーチカのある収容所に移った。また八中隊の兵隊と分かれた。百七、八十人くらいいたようだが、ほとんど航空修理所の兵隊で隣に寝ているのもだれやらわからぬ、話相手もなく八中隊の戦友はどこにいるのか。

収容所内はペーチカが二つあり、れんがづくりの大きなものだ。広い部屋には裸電球が三つあり、寝台は二段で四人ずつ寝るようになっていた。後で中に板を敷いて上下二段になったが、最初は寝ていても落ちそうで寝られない。それに南京虫がいて静かになるとゴソゴソ這い込んでくる。かまれたところがはれ上がり、かゆくてたまらない。つぶしたり、ローソクで板の間にいるのを焼き殺す。しばらくはいいが、また出てくる。そこで手袋をし、袖口をしばり包帯包のガーゼで袋をつくり、頭からかぶり首をしばったが、手首や首はよくなったが、腹の方はとめようがない。これではたまらんと思ったが、次第になれてかまれても平気になった。

収容所の生活も段々となれてきたが、食べ物は段々と悪くなる。最初は米を食べていたが、何かソ連人が言ったとか、米は暖かいところでとれるので体が冷えて皆死んでしまうとかで、燕麦の飯を食べさせられた。馬と一緒になったようだ。それからはアワ飯から大豆、精白コウリャン、半つきコウリャンおかゆと最後まで食べさせられた。最初のころは飯上げや分配はやっていたが、食べ物が少なくなるにしたがって下士官が分配するようになった。暗い電灯の下で六時か七時か知らないが九時までに工場に行かねばならないので朝早いと思うが、百数十人の見守る中で朝食と昼の黒パンを分配する。かゆになってからは食器一杯だが、飯のときは大変だ。押さえつけて盛ったり山盛りするか監視する。分配が終わると朝食を食べ昼食のパン（三百グラム）を飯盒に入れて工場に行く。

二十一年の春から夏になってからは白夜で、朝は五時ころに夜が明け、夜は十一時ころまで明るい。冬と反対である。腹が減るので朝のおかゆと昼のパンを朝食べてしまい、空の飯盒を持って工場に行く。昼の一時間の休憩時間に草を取って食べる。夏に最初ヨモギがたくさんあるので取って食べたが、にがい。次にヘズリ、これは菜っ葉のようで食べられた。次はオカカリ等、名はわからぬがいろいろなものを採って食べた。三か月くらいの間、春夏秋の草が次々に生える。工場内の草もなくなり、板塀と鉄条網の間にまだたくさん

の草があるので採りに行く者がいるが、命がけである。ソ連兵が見張台の上から自動小銃をかまえている。見つかれば撃たれる。秋になって伐採等で山に行く者がキノコを採ってきて炊いてくれと言う。ペーチカをたくまでは火のあるところは機械工場だけだ。中には毒キノコを持ってくる者がいる。食べて死んだ者もいたという。

一週間に一回は入浴がある。入浴といっても、服を滅菌場に入れて温度をかけてシラミを殺す。浴場といってもおけとお湯をもらい行水であるが、顔と手足を洗い、ふんどしと手拭を洗濯してペーチカで乾かし、滅菌した服を着て帰る。また裸でソ連兵の検査を受けるたびに私物を取られる。時計もどうせとられるからパンやたばことかえる者もあり、私らの収容所では時計を全部集めて幹部が保管していたが、トランクごととられたと言っていた。

作業場は製材所で、収容所から三キロくらいあったような気がする。点呼は一時間近くもかかるので終わるまで足踏みしている。道中は剣付鉄砲や自動小銃を持った兵隊が付いている。途中小便等で列を離れると、自動小銃を上に向けて発射する。馬より悪い取り扱いだ。私は地方で何をしていたかと聞かれて、油差しをしていたと言った。技術者は帰れないと収容所での話だったのでうそを言った。仕事はアレスモスネー（かんな盤）に油を差したり刃を取り替える。機械が四台あり刃を取り替えるのは、機械がとまったときと休憩時間だ。刃が壊れて板に傷が出るとすぐ取り替えねばならぬ。目立て工場の工場長はアロジオンカルポービッチといってソ連人としては頭のいい方で、思想犯で十九年の刑でこの収容所に入ったという。おとなしくて、怒らないソ連人であった。あるとき刃を替えるときに私のハンマーと使いぶりをみてマッセル（技術者）だという。仕方がないので、ブリキ屋だと言った。かんな盤の刃の取り替えも大変だし、寒いので大手袋をかけてスパナを使ったり、ハンマーを使ったり、刃が凸凹していると板に傷がついたり、ブリキ仕事なら屋内でペーチカのそばでできるので、やったことはないけど、何とかなるだろうと、アロジオンがハロンスキ

ー（好いロシア人）らしいので。

最初の仕事が煙突だ。乾燥場の煙突でアロジオンに教わりながらつくったが、寸法をロシア語で言うのでサッパリわからない。直径を板に書いてもらい、ロシア人は紙がないので、シラカバの板にカレンダーン（鉛筆）で書く。これも日本兵から取ったものだろう。大変大切にしていた。単位はメートルで直径に円周率を掛けてマチヤル（材料のトタン）に罫書き、切りばさみで切り、（このはさみも大きなもので内地のはさみの倍くらいもある）どうにかつくり、アロジオンはハラショウと言ってくれた。煙突がどうにかできたが、それからが大変だ。乾燥場に煙突を立てよと言う。屋根の上に登って作業せねばならぬ。目立て工場に七人ほどいたので、乾燥場の兵隊とでどうにか取りつけた。アロジオンはミスキー（食器）やバケツロスカン（ペーチカの上に掛け湯をわかしたりする鍋で丸いおけのようなもの）や柄を付けた湯飲みのようなものを、満州から持ってきたのか、コールタールで塗った屋根トタンを延ばした材料でつくる。水をとめるのにハンダがないので、油と土でねったものをかみ合わせの中に入れてつくるが、水はあまりもらない。とにかくだいぶ仕事にもなれて楽になった。

二十二年の冬になった、体の調子が悪い。胃が悪いのか食べ物をあげる。機械工場の長でカンチャロクという上級中尉が雪の上で吐くのを見て、ボリノエ（病気）だ、スパーチ（休め）と言う。伊藤少佐が佐官室の当番に来いと言われて行くことにした。佐官室の床下に米がありおかゆを炊いて食べ、病気はよくなった。伊藤少佐がもう工場に行くな、錬成隊に行けという。工場に行ったら死んでしまうと言われた。佐官室の当番は掃除とか、時に飯を炊くくらいで楽だ。佐官が五人ほどいたと思う。

二十二年一月に錬成隊に転属することになった。三十人くらい地下壕みたいなところに集まり、引率され行軍で錬成隊に着いた。二千人いて作業隊でオーカ、デアジンとなった者がここで体力を回復させ、また作業隊に行くといったシステムだ。体力のよい方から一級、二級、三級、オーカ、デアジンの順がある。三級

から上が作業隊に行く。各作業隊の寄り集まりで沖縄から北海道まで全国の者がいる。印象深いのは伊豆の伊東温泉の主人と寝台が一緒で、年齢も余り変わらず面白い話を聞かせてくれた。鹿児島、東北地方の人の言うことはわからない。作業隊と違って掃除するくらいで外に仕事はなく楽であった。

一番よいところは入室患者室だ。給与もよいようだ。三十七度以上の熱があれば入室できる。何週目であったか発熱したので週番下士官に申し出て入室させてもらった。入室してみると、一週間に一回ソ連軍医が診察に来る。体温計を十本くらい持ってきて熱を計り、三十七度以上あれば、また一週間はいられる。患者の中にもボスがいて熱の高い者は下段。熱の低い者は上段というぐあいで。軍医も全員計るわけでなくチンピラトール（熱）イエス、ニエスと聞く、イエスと言えばそれで通る。聴診器はラッパのようなもので、大きい方を胸に当て、小さい方を耳に当てて診察する。また薬はゲマストーゲンという薬で、風邪であろうと腹痛であろうと薬はこれしかないらしい。考えてみると生水はもちろん茶、コーヒーもなく、パンとスープだけなので、風土も一緒で病気も一定の病気しかないらしい。日本人のような下痢患者はないらしい。大便も馬の糞のようでトイレットペーパーも必要ないようだ。中国でもそうであったが生水は飲めない。硬水でシベリアは中国より石灰分が多い。飯盒一杯の水をわかして沈でんさせると下に一ミリくらい石灰がたまる。

退屈だが給与もよいし、ここから出て作業隊にでも行かせられたら大変だ。そのうちダモイの情報が入ってきた。この錬成隊で編成があるらしいという。入室患者も入るだろうか、取り残されたら大変だ。名簿ができたらしく発表がありダモイが決まった。

ダモイ

編成がありアルファベット順に並びソ連兵の点呼を受ける、五十人くらいいたと思う。名簿順に並んでソ連兵が呼んだときに返事をせねばオミットになるということで、緊張した。数日後ダモイの汽車に乗り込みホットした。貨車は二段で入ソのときと同じだが、装

具や米がないのでややゆったりしていた。ただ靴が木でつくったサンダルのようなもので木靴といっていた。氷の上を歩くのに大変だ。貨車の中では元気な方だったので、ビヤ樽を二人で担いで水を取りに行く。飯取り連絡など車内でも仕事があった。

二週間くらいでナホトカに着いた。入るところがなく海岸の砂浜におろされた。四月中ころでまだ寒い。砂を掘って積み上げ、風よけをつくり十人くらいずつ入る。余り深く掘ると潮水が入る。そしてたきものを取りに行く。ソ連の監視兵がいるが、現行犯なので見つからねば大丈夫。砂の上に毛布を一枚敷いて寝ると寒い。近くの山に木の葉を取りに行き、下に敷く。帰還者は三万人ほどいて汽船は貨物船で二千人くらいだそうだ。最初に砂浜幕舎、収容所、乗船と順番がある。その間、日本青年同盟が共産教育をする、赤旗やインターナショナルを歌う。言うことを聞かないと部隊全部がまた作業隊へ戻される。我々もナホトカに着くと階級章をはずし、防寒帽の星の上に裏返しに縫いつけ、赤いマークをつけたようにする。

一か月してだいぶ帰る日が近づいたある日、散髪に行った。散髪といっても半日がかりで、何十人かが順番を待って座り込んでいる。散髪の幕舎に入ると三、四人が散髪している。中に高津屋に似た人がいる。海軍のはずなので人違いかと思ったが、思い切って「高津屋」でないかと言ってみた。私は大変な変わりようなのでわからなかったそうだ。「八幡だ」奇跡である。こんなところで友達に会おうとは、高津屋が一船先に帰ると言うから、実家に伝言を頼んだ。

ナホトカではいろいろデマが飛び、日本は敗戦で食糧不足のため、毎日何千人の餓死者が出るとか、空襲で大都会は焼野原になっているとか、一部残留希望者が出たようだ。いよいよ乗船の日が来た。いろいろ調べられ点呼があり、乗船が始まった。私は最後尾で船に乗るまで不安であった。船に乗ってから思わず万歳を叫んだ。藤部隊の兵隊とは会えず、一人ぼっち、でも皆いろいろな話をする。都会の連中は家がどうなっているか、食べ物はあるか、仕事があるか等々、帰る喜びと不安とで話は尽きない。東北や九州の者は汽車

はあるだろうか。三日目にデッキの方で日本の漁船がいるというので大騒ぎであった。

やがて舞鶴に着き、はしけで桟橋に上る。いよいよ帰ったという気持ちになった。検疫を終わって風呂に入った。満州西安の発電所の風呂以来である。そしておかゆを食べた。こんなにうまいおかゆは始めてである。二、三日いたような気がする。被服、靴、旅費、カンパンを受け取り汽車に乗った。各駅停車なのでちょっと走ってはとまる。シベリアでは駅と駅まで何時間もかかる。時には半日も走り続ける。

松江駅に着いた。町は余り変わっていない。野津旅館に行った。昔どおりだ。自分の家に帰ったようだ。松江から隠岐丸で知夫里、浦郷、別府を経て菱浦だ。皆が出迎え、我が家に帰った。工場のどこも変わっていない、夢のようだ。父も母も家内も弟たちも親類、近所の人も皆元気でいた。

昭和二十二年六月であった。

悪夢のシベリア

岩手県　折居次郎

はじめに

今思い出してもぞっと肌の寒くなるあのシベリア抑留の三か年。明日への命をつなぐにさえ乏しい粗悪な少量の食事をむさぼり、ただ働かされ、そして寒さと空腹に眠れぬ夜を過ごし飢えの毎日に耐えてきた。特に二十年の最初の越冬のころはひどいものだった。

飯盒のふた一杯のかゆを毎日二回だけの日が続き、酷寒の環境への不なれもさることながら、栄養の絶対量の不足で次から次へと死者が出た。仕事の能率などは論外で、生き延びた者は幸運と言うほかない。

次第に食事も改善され、病弱者は優先的に帰還し、作業にもなれ過ごしてきた三か年だが、その間一回たりとも満腹したことはなく、帰るまで飢餓感は続いた。肉体的にはようやく仕事に耐えれるようになったこ